

Time Perspective と Personality との関連 X  
 —— 自己存在様式各次元を指標として ——

中島千加子\*・吉田 昭久\*\*  
 (1990年9月14日受理)

On Time Perspective and Personality X:  
 Dimensions of the Mode of Existence

Chikako NAKAJIMA and Teruhisa YOSHIDA  
 (Received September 14, 1990)

はじめに

前論文<sup>1)</sup>においては、自己存在様式に関する因子分析的検討を通して、現代青年の自己存在様式 (The Mode of Existence) の様相を明らかにし、そこに反映するTime Perspectiveの広がり<sup>2)</sup>の無さ、そしてそれに伴う「疎外 (alienation)」<sup>2)</sup>の危機について言及してきた。現代青年の多くは、自己に関して、知性化という観念的な在り方でかかわり、現実的には退行的方法、あるいは抑圧という自我防衛機制を強く働かせた自己中心的な存在様式を示しており、他者を信頼しようとしつつも信頼出来ず、疑惑の対象としてかかわり、他者を拒絶、または他者から孤立していることが伺えた。これは、フロム、E. も指摘したように、自己及び他者とのかかわりが「死んだ関係」になっている「持つ様式 (the having mode)」<sup>3)</sup>が増大していることを示唆している。そこから、自己も他者も受容出来ない現代青年の姿をうかがい知ることが出来、他者に共感出来ず、自己にも真正面に向き合えぬほど、現代青年のTime Perspectiveは狭量化していると推量することが出来る。本論文においては、この因子分析的検討を踏まえつつ、それによって妥当であると確認された自己存在様式に関する構造を用い、新たに実施した質問紙調査に基づき、自己存在様式とTime Perspective各次元間の関連を明らかにしていくことを目的とする。本論文の概要を示せば以下のとおりである。

I 大学生を対象とした質問紙調査

- I-1 自己存在様式に関する調査視点の構造
- I-2 Time Perspective に関する調査視点の再構造化
- I-3 質問紙調査の実施

\* 茨城大学大学院教育学研究科.

\*\* 茨城大学教育学部教育臨床心理学研究室.

## II Time Perspective 各次元との関連

- II-1 「感情の状態」との関連
- II-2 「かかわりの対象」との関連
- II-3 「対象への取り組みの態度」との関連

## III 自己存在様式と Time Perspective との関連

- III-1 「感情の状態」を規定する Time Perspective
- III-2 「かかわりの対象」を規定する Time Perspective
- III-3 「対象への取り組みの態度」を規定する Time Perspective

## I 大学生を対象とした質問紙調査

### I-1 自己存在様式に関する調査視点の構造

前論文<sup>4)</sup>では、調査を行うにあたり、自己存在様式に関する調査視点の構造を「感情の状態」「かかわりの対象」「対象への取り組みの態度」の三つの次元から仮設したが、因子分析の結果、「感情の状態」は「安定感 (security)」と「不安定感 (insecurity)」に分化し、また、「かかわりの対象」は「自己 (self)」と「他者 (others)」に、更に、

「対象への取り組みの態度」は「消極的 (passive)」と「積極的 (active)」というようにそれぞれ分化することが明らかになった。即ち、自己存在様式は、「感情の状態」「かかわりの対象」「対象への取り組みの態度」という三次元で構造されているという仮説は妥当であることが確認された。また、自己存在様式に関する8因子が抽出解釈され、現代人の自己存在様式の八つの様相が明らかとなった。その様相に関しては前論文を参照されたい。

本研究においては、因子分析の結果、妥当性が認められた構造（表1参照）と質問項目を使用し、新たに調査を行った。

### I-2 Time Perspective に関する調査視点の再構造化

Time Perspectiveの心的構造は、既論文<sup>5)</sup>において詳細に述べてある。「時間性」「かかわりの深さ」「対象の広がり」という三つの次元でその構造を仮設し、質問紙調査を行い、因子分析的に検討したが、その結果、「時間性」は「刹那」「有限」「無限」に分化し、また、「かかわりの深さ」は「浅」「深」に、更に「対象のひろがり」は「自己」「他者」「もの」「自然」というように分化することが明らかとなった。即ち、Time Perspectiveを「時間性」「かかわりの深さ」「対象のひろがり」の三次元から構造的にとらえることの妥当性が示されたと言える。更に、「時間性」に関しては「刹那」「有限」「無限」の順で、「対象のひろがり」に関しては「自己」「もの」「他者」「自然」の順で重みづけられており、それぞれの方向性も確認された。

表1 自己存在様式の構造

a	b	c	消 費 的 (passive)	積 極 的 (active)
自 己 (self)	不安定感 (insecurity)	逃 避 (escape)	拒 絶 (rejection)	
	安 定 感 (security)	補 償 (compensation)	知 性 化 (intellectualization)	
他 者 (others)	不安定感 (insecurity)	孤 立 (isolation)	同 一 視 (identification)	
	安 定 感 (security)	同 調 (sympathy)	連 帯 (solidarity)	

注) a: かかわりの対象 b: 感情の状態 c: 対象への取り組みの態度

表2 Time Perspective に関する構造と具体的質問項目

		c	a	b
		利	那	限
		有	無	限
浅	自己	<p>期待 (expectation)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 寝たきりになって人に迷惑をかけないように、善段から誕生している。</li> <li>2. おそらく無難な生活を送ることができているのだから、今のままの生活を続ける。</li> <li>3. 病気で思うことができないと、落ち着いて寝ていられない。</li> </ol>	<p>観 (forsighted)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 考え込んでしまうものでもないで、楽しく過ごしている。</li> <li>2. 過去の失敗はすんでしまったことだから、くよくよ悩まない。</li> <li>3. どうあがいてもなるようにしかならないので、その時すべきことをしている。</li> </ol>	<p>無</p>
	他者	<p>同感 (agreement)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 他人と違う意見を持ってたとしても、議論することはない。</li> <li>2. 自分にとって大切ではない人でも、なりゆきでつきあっている。</li> <li>3. どんなことで侮辱されても、平静にしている。</li> </ol>	<p>情 (sympathic)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 重そうな荷物を持っている老人がいたら、いつも持っただけで困っている障害者を見かけたら、手を貸している。</li> <li>2. 階段などで困っている人がいたら、必ず声をかけている。</li> </ol>	<p>無</p>
深	自己	<p>執着 (persistence)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 良いものを買うときは、メーカー品(ブランド製品)を買っている。</li> <li>2. きれいな花であれば、たいてい持ち帰る。</li> <li>3. かわいいい動物であれば、近寄って触れてみたりする。</li> </ol>	<p>観 (resignation)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. どのようになささいな仕事でも、一所懸命やっている。</li> <li>2. どのような時でも、自分のすること全てに責任をもっている。</li> <li>3. たたえ突然死ぬようなことになっても、これまでの人生を悔いることはない。</li> </ol>	<p>無</p>
	他者	<p>希望 (hope)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 就職を有利にするために、毎日の勉強をしている。</li> <li>2. 休講の時などは、良い成績をとるために図書館で勉強している。</li> <li>3. 今の自分の性格は受け入れられないが、変えるように努めている。</li> </ol>	<p>観 (resignation)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. どのようになささいな仕事でも、一所懸命やっている。</li> <li>2. どのような時でも、自分のすること全てに責任をもっている。</li> <li>3. たたえ突然死ぬようなことになっても、これまでの人生を悔いることはない。</li> </ol>	<p>無</p>
深	自己	<p>無関心 (unconcern)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 酒を歩いている時、花や草木に目を向けることはない。</li> <li>2. 野や山へ行っても、鳥の鳴き声などに耳を澄ますことはない。</li> <li>3. 夜、空を見上げて星をながめるようなことはない。</li> </ol>	<p>配慮 (consideration)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 他人に良い印象を与えるように、いつも心掛けて行動している。</li> <li>2. 自分にとって大切な友達や親には、心配をかけるような行動をしている。</li> <li>3. 自分にとって大切な人の相談には、いつも親身になる。</li> </ol>	<p>無</p>
	他者	<p>無感動 (apathy)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 汚れた食器がたくさんあっても、使わなければ放っ置く。</li> <li>2. 棚の上にはごりがたまっていても、特に掃除はしない。</li> <li>3. 足を止めてまで、花に見入るようなことはない。</li> </ol>	<p>共感 (compassion)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 混んだ車内などで、子ども連れの人にはいつも席を譲る。</li> <li>2. たまたま行きあわせた人の話でも、本気で相手の話を聞く。</li> <li>3. 学歴や職業にかかわらず、どんな人ともつきあう。</li> </ol>	<p>無</p>

注) a : かかわりの深さ b : 対象のひろがり c : 時間性

しかしながら、この構造において、「有限—浅—自然」《疎外 alienation》と交絡させて現象記述した項目は因子を構成する質問項目とはなり得なかった。つまり、Time Perspectiveの質問項目としては適切さを欠く項目であったと言える。そこで、本研究では、既報告の因子分析結果をもとに、Time Perspectiveの再構造化を試みた。「時間性」「かかわりの深さ」「対象のひろがり」という三つの次元で構造的にとらえることの妥当性は認められたので、この三次元のうち、「対象のひろがり」に関して「自己」「他者」「もの」の三水準に設定し直して項目の整理を行った。前論文でも述べたように、実存主義哲学の立場では、「世界—内—存在 (In-der-Welt-sein) 」<sup>6)</sup>としての人間のかかわる世界 (world) とは、「まわりの世界 (Umwelt) 」「共にある世界 (Mitwelt) 」「独自の世界 (Eigenwelt) 」という三つの様態 (mode) <sup>7)</sup>を前提とする。それぞれの世界において人間のかかわりは、「もの」「他者」「自己」という対象を持つ。ここでの「もの」とは、物 (object) だけでなく、単にあるものではない価値的、恣意的な意味を持つ「もの」（例えば宗教、信念など）、及び自然の世界 (natural world) 内にあるものをも含む。世界の中心は「自己」であり、周囲には、「私」と同じ人間である「他者」が存在する。また、人間にとって、意味を持つ道具存在、そしてそれらを包みこむ自然としての「もの」がある。以上のように対象は「自己」「他者」「もの」へと広がりを持っている。「時間性」「かかわりの深さ」の次元に関しては前出の既論文に詳細に述べてあるので参照されたい。

これら三次元を交絡させ、また因子分析の結果抽出された各因子と因子を構成する項目のまとまり及び因子負荷量を考慮して、各交絡部分に3項目ずつ、合計54の質問項目を厳選した。再構造化したTime Perspectiveの構造とその調査視点に基づく具体的質問項目を表2に示す。

### I-3 質問紙調査の実施

本研究で使用した質問票は、Appendix I-i ~iiiに示した。内容は調査のお願い、Face Sheet、回答の際の注意点、二つの設問（〔1〕自己存在様式に関するもの、〔2〕Time Perspectiveに関するもの）から構成されている。質問項目の回答形式は、〔1〕〔2〕とも、「あてはまる」から「あてはまらない」までの7段階で評定させ、前調査<sup>8)</sup>同様、今の自分の在り方を意識化することによって、該当箇所に○印を付ける方法を取った。（Appendix I-i ~iii参照）。

調査期間は、1989年12月上旬であり、調査方法は、大学教官に依頼し講義を割愛していただく方法と、特定の調査場所を設けず、調査員が被調査者個人に直接質問票を配布し、回答記入後個々に回収する方法との二方法を取った。本調査における被調査者の大学名、人数、有効データ数は表3に示したとおりである。4年制大学生と限定した被調査者の選定理由及び調査における得点化の方法等は、既報告の論文<sup>9)</sup>に詳述したので参照されたい。

表3 被調査者の大学分布及び有効データ数

大学名	被調査者数 (人)	有効データ数		
		男	女	計
茨城大学	304	125	161	286
茨城キリスト教大学	16	3	12	15
筑波大学	40	21	12	33
共立薬科大学	20	0	20	20
玉川大学	25	20	4	24
東海大学	25	19	5	24
計	430	188	214	402

## II Time Perspective 各次元との関連

本調査で使用した質問項目は、因子分析の結果自己存在様式及びTime Perspectiveに関する質問項目として妥当であると認められたものであるが、二つの心理現象間の関連を見る前に、各項目の弁別性を見る目的で、それぞれの項目をG-P分析によって検討した。以下に、その手順を述べる。まず、自己存在様式とTime Perspectiveのそれぞれに関して被調査者ごとの合計得点を算出し、上下25%を高得点群（H群）、低得点群（L群）に分類抽出した。更に、H群、L群に属する各被調査者が、各項目においてどのように得点しているかを各項目ごとに2×2分割表に表し、カイ二乗検定を行った。各項目のH群、L群は、強制二分法により、4点は省き、7、6、5点をH群、3、2、1点をL群として分類した。結果を表4、5に示す。尚、G-P分析に用いた各項目毎の群間分布表はAppendix II-i～iiに示した。

G-P分析の結果、有意差が認められなかった項目は、自己存在様式に関しては40項目中4項目（項目番号5、9、10、25）、Time Perspectiveに関しては54項目中11項目（項目番号1、3、4、5、11、15、16、22、29、38、46）であった。これらは、自己存在様式、及びTime Perspectiveに関する質問項目としての弁別性に欠け、検討の余地のあることが示唆された。つまり、心理現象として自己存在様式、またはTime Perspectiveを抽象化することが出来ていなかった項目であったと言える。これらの項目は、先の因子分析の結果でも、因子負荷量が低いものであるか、あるいは、本調査において被調査者の回答が著しく偏っていたものであった。このG-P分析の結果、妥当であると認められた項目の得点のみを用いて、自己存在様式とTime Perspective各次元間の関連を見るための分析を行った。

表4 自己存在様式に関するG-P分析結果

項目番号	カイ二乗の値		項目番号	カイ二乗の値	
22	87.4286	***	13	14.9135	***
15	76.8148	***	36	10.2854	**
21	51.7895	***	11	10.0410	**
33	49.2239	***	32	9.6823	**
28	40.8016	***	12	8.1377	**
24	38.2413	***	4	7.9681	**
27	36.1483	***	20	7.4089	**
34	31.5392	***	40	6.9351	**
26	22.8317	***	16	6.5285	**
17	22.7025	***	8	6.1156	*
6	21.5332	***	1	5.2196	*
3	21.4654	***	29	4.8312	*
31	19.8093	***	39	4.7320	*
30	19.8024	***	18	4.4194	*
23	19.6842	***	7	4.2988	*
35	19.5177	***	37	4.2474	*
19	18.4288	***	25	1.8724	
2	18.2933	***	9	1.6092	
14	17.5252	***	10	1.4741	
38	16.4200	***	5	1.1185	

注 \* 5%水準で有意差あり  
 \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり

表5 Time Perspectiveに関するG-P分析結果

項目番号	カイ二乗の値		項目番号	カイ二乗の値	
41	51.5948	***	40	14.5770	***
39	41.5086	***	27	13.9307	***
21	36.0254	***	24	13.2379	***
35	35.7986	***	2	12.8795	***
17	29.5839	***	48	12.1751	***
14	25.9524	***	8	12.0926	***
20	25.9016	***	13	12.0435	***
25	24.6776	***	6	11.5992	***
37	24.3232	***	23	11.3022	***
52	23.6137	***	31	9.6581	**
33	23.1715	***	44	9.0185	**
50	23.1586	***	26	6.7321	**
42	20.8493	***	51	6.6529	**
30	20.4362	***	12	5.1178	*
54	20.0874	***	19	5.0169	*
53	19.2509	***	36	4.3621	*
45	18.1582	***	15	3.6658	
49	17.9839	***	46	3.2978	
32	17.6155	***	38	3.0302	
9	16.4136	***	3	2.7692	
47	15.8948	***	29	2.3313	
10	15.5580	***	4	2.1531	
18	15.5403	***	5	1.0809	
43	15.3847	***	22	0.5741	
7	15.3461	***	11	0.3181	
34	15.2376	***	16	0.0646	
28	15.2230	***	1	0.0338	

注 \* 5%水準で有意差あり  
 \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり

II-1 「感情の状態」との関連

人間が生きていく過程での、「感情の状態」は、「安定感」と「不安定感」という相反する二方向に分化することは既に述べた。ここでは人間の「感情の状態」を規定している Time Perspective の質を、以下のような分析を行うことにより、「時間性」「かかわりの深さ」「対象のひろがり」という三側面から検討する。

まず、自己存在様式を構造する「感情の状態」に関して、「安定感」得点（自己存在様式の具体的質問項目視点「補償」「知性化」「同調」「連帯」の合計得点）及び「不安定感」得点（「逃避」「拒絶」「孤立」「同一視」の合計得点）を算出した。同様にして、Time Perspectiveを構造する「時間性」に関して、「刹那」（Time Perspectiveの具体的質問項目視点「享楽」「同調」「無関心」「虚無」「排除」「無感動」の6部分）、「有限」（「期待」「同感」「執着」「希望」「配慮」「愛着」の6部分）および「無限」（「達観」「同情」「崇拜」「諦観」「共感」「共生」の6部分）各得点を算出した。これらを用い、二つの「感情の状態」（不安定感，安定感）と「時間性」の三水準（刹那，有限，無限）との関連性をとらえるため、それぞれを交絡させて、カイ二乗検定を行った。結果は、表6に示すとおりである。検定の結果、「安定感」に関しては「刹那」との間には有意差が見られず関連性が認められなかったが、「有限」及び

「無限」との間には0.1%水準で有意差が認められ、また「H群-H群」「L群-L群」の組み合わせにおける人数が相対的に多いことから、正の方向で関連があることが認められた。一方、「不安定感」に関しては、「刹那」「有限」との間に正の方向性をもつ関連が、また、「無限」との間には、「H群-L群」「L群-H群」における組み合わせの人数が相対的に多く、負の方向性をもつ関連が示された。このことから、感情の状態が「安定感」となる存在様式であれば、その人間の時間性は「無限」にまで広がるが、「不安定感」の高い存在様式であれば、その人間は、「刹那」的あるいは「有限」的な時間性の中で生きていることが示唆される。また、カイ二乗値が他の交絡部分より高いことから、「安定感」と「有限」の間、そして「不安定感」と「刹那」との間に、特に強い関連があることがうかがえる。

同様の手順で、二つの「感情の状態」とTime Perspectiveを構造する「かかわりの深さ」の水準である「浅」（具体的質問項目視点「享楽」「期待」「達観」「同調」「同感」「同情」「無関心」「執着」「崇拜」

表6 「感情の状態」と「時間性」との関連

a \ b	H-H	H-L	L-H	L-L	X <sup>2</sup>
安定感-刹那	23	26	26	29	0.0012
安定感-有限	46	8	6	46	57.4927 ***
安定感-無限	42	14	12	39	28.2872 ***
不安定感-刹那	49	8	5	56	71.7988 ***
不安定感-有限	35	16	14	40	19.2157 ***
不安定感-無限	16	37	34	18	13.0353 ***

注) \* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり  
 a : 「感情の状態」の各水準と「時間性」の各水準との交絡  
 b : 各水準の得点による上位群，下位群の組み合わせ

表7 「感情の状態」と「かかわりの深さ」との関連

a \ b	H-H	H-L	L-H	L-L	X <sup>2</sup>
安定感-浅	44	9	15	40	33.8411 ***
安定感-深	54	12	7	45	54.4235 ***
不安定感-浅	34	17	15	38	15.3527 ***
不安定感-深	36	19	23	32	6.1781 *

注) \* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり  
 a : 「感情の状態」の各水準と「かかわりの深さ」の各水準との交絡  
 b : 各水準の得点による上位群，下位群の組み合わせ

の9部分)と「深」(「虚無」「希望」「諦観」「排除」「配慮」「共感」「無感動」「愛着」「共生」の9部分)とを交絡させ、カイ二乗検定による検討を行った。結果を表7に示す。検定の結果、「安定感」に関しては0.1%水準で「浅」「深」双方との間に有意差が見られ、特に「深」との間に、「H群-H群」「L群-L群」の組み合わせの人数が相対的に多いことから正の方向性を持ったより強い関連のあることが示された。また、「不安定感」に関しては「浅」との間に、「深」との間よりも強い、正の方向の関連があることが示めされた。このことから、対象と「深」くかかわれば、より「安定感」が増大し、一方、対象とのかかわりが「浅」ければ、「不安定感」がより増大するということが示唆される。

更に、二つの「感情の状態」と Time Perspective を構造する「対象のひろがり」の水準である「自己」(具体的質問項目視点「享楽」「期待」「達観」「虚無」「希望」「諦観」の6部分)と「他者」(「同調」「同感」「同情」「排除」「配慮」「共感」の6部分)、及び「もの」(「無関心」「執着」「崇拜」「無感動」「愛着」「共生」の6部分)との関連性をとらえるため、同様に各々を交絡させカイ二乗検定を行った。結果を表8に示す。表8より、「安定感」においては、「自己」「他者」「もの」との間に、「H群-H群」「L群-L群」の組み合わせにおける人数が特に多く正の方向の関連があり、その関連は「他者」「自己」「もの」の順に強いことが示された。

一方、「不安定感」に関しては、「もの」との間に有意差が認められず関連を示さなかったが、「自己」「他者」との間には、それぞれ正の方向で関連があることが認められ、特に、「自己」とのより強い関連がうかがえた。これにより、自己存在様式において「安定感」が高ければ、対象は「もの」にまで広がるが、「不安定感」が強ければ、「対象のひろがり」は「もの」にまでは至らず、他人という人に限定された「他者」にまでしか広がらないことが理解出来る。即ち、「不安定感」が高ければ、対象としての「もの」とのかかわりは希薄になることを示唆している。

II-2 「かかわりの対象」との関連

次に、前節と同様カイ二乗検定を用い、自己存在様式における「かかわりの対象」の各水準「自己」(具体的質問項目視点「逃避」「拒絶」「補償」「知性化」の4部分)及び「他者」(「孤立」「同一視」「同調」「連帯」の4部分)とTime Perspective 各次元との関連を検討して

表8 「感情の状態」と「対象のひろがり」との関連

a \ b	H-H	H-L	L-H	L-L	X <sup>2</sup>
安定感-自己	47	10	20	36	25.5694 ***
安定感-他者	49	7	9	46	56.2799 ***
安定感-もの	37	18	15	35	14.5554 ***
不安定感-自己	37	15	10	42	28.3001 ***
不安定感-他者	35	15	14	33	15.6722 ***
不安定感-もの	24	30	26	26	0.3281

注) \* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり  
 a : 「感情の状態」の各水準と「対象のひろがり」の各水準との交絡  
 b : 各水準の得点による上位群, 下位群の組み合わせ

表9 「かかわりの対象」と「時間性」との関連

a \ b	H-H	H-L	L-H	L-L	X <sup>2</sup>
自己-利那	39	20	7	41	28.6625 ***
自己-有限	39	12	11	46	35.3869 ***
自己-無限	23	23	32	32	0.0000
他者-利那	42	13	12	47	35.8371 ***
他者-有限	44	9	8	48	51.5638 ***
他者-無限	32	26	22	31	2.0694

注) \* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり  
 a : 「かかわりの対象」の各水準と「時間性」の各水準との交絡  
 b : 各水準の得点による上位群, 下位群の組み合わせ

みよう。まず、「かかわりの対象」（自己，他者）と「時間性」の三水準（刹那，有限，無限）とを交絡させ，カイ二乗検定を行った。その結果は表9に示すとおりである。「かかわりの対象」が「自己」に関しては，「自己－刹那」「自己－有限」間に正の方向性をもった関連性が認められる。カイ二乗値が大であることから，特に後者の関連が強いことが示唆される。「自己－無限」間のカイ二乗値は0.0000であり，関連は全くないことが示された。また，かかわりの対象が「他者」に関しては，「他者－刹那」「他者－有限」間に正の方向で関連があったが，「他者－無限」間には有意差が認められず関連性が示されなかった。以上のことから，「自己」とのかかわりであれ「他者」とのかかわりであれ，現代人の時間性は「無限」には広がっていないことが推量出来る。「他者」とのかかわりにおける時間性は，「刹那」的あるいは「有限」的であるが，カイ二乗値から特に「有限的」な時間性の中に在るものが多いことを示唆している。

次に，「かかわりの対象」とTime Perspectiveの次元「かかわりの深さ」

（浅，深）との関連の検討結果を表10に示す。「かかわりの対象」が「自己」及び「他者」双方に関して，「かかわりの深さ」の「浅」「深」それぞれとの間に，正の方向性をもった関連が認められた。この結果からは，「かかわりの深さ」における「浅」「深」の水準は，相対的なものとして位置付けられていることが理解される。特に，「浅」とのより強い関連がうかがえ，かかわりの対象が「自己」であろうと「他者」であろうと，「浅」い水準でのかかわりしか持っていない，あるいは持とうとしない現代人の傾向性を反映した結果と言えよう。

更に，表11に，自己存在様式における「かかわりの対象」とTime Perspectiveにおける「対象のひろがり」（自己，他者，もの）との関連を検討した結果を示す。検定の結果，「他者－もの」間を除いた総てにおいて，正の方向で関連性が認められた。このことは，「自己」とのかかわりを持てる者のかかわりの対象は「もの」にまで広がるが，「他者」とかかわりを持てる者であっても，その対象の広がりは，人に限定された「他者」までには広がっていないことを示している。カイ二乗値を比較すると，「自己－他者」「自己－もの」間よりも「自己－自己」間に，また「他者－自己」間よりも「他者－他者」間に強い関連があることがうかがえる。

表10 「かかわりの対象」と「かかわりの深さ」の関連

a \ b	H-H	H-L	L-H	L-L	X <sup>2</sup>
自己－浅	37	12	13	39	25.7477 ***
自己－深	34	15	20	42	15.1038 ***
他者－浅	48	10	8	43	48.8706 ***
他者－深	49	11	14	43	38.3557 ***

注) \* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり

\*\*\* 0.1%水準で有意差あり

a : 「かかわりの対象」の各水準と「かかわりの深さ」の各水準との交絡

b : 各水準の得点による上位群，下位群の組み合わせ

表11 「かかわりの対象」と「対象のひろがり」の関連

a \ b	H-H	H-L	L-H	L-L	X <sup>2</sup>
自己－自己	40	13	12	38	27.2676 ***
自己－他者	33	14	17	39	16.2501 ***
自己－もの	30	18	19	33	6.7319 **
他者－自己	46	12	9	39	38.5850 ***
他者－他者	52	7	7	50	66.7460 ***
他者－もの	27	23	21	32	2.1372

注) \* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり

\*\*\* 0.1%水準で有意差あり

a : 「かかわりの対象」の各水準と「対象のひろがり」の各水準との交絡

b : 各水準の得点による上位群，下位群の組み合わせ

II-3 「対象への取り組みの態度」との関連

更に、自己存在様式における「対象への取り組みの態度」の水準である「消極的」（具体的質問項目視点「逃避」「補償」「孤立」「同調」の4部分）及び「積極的」（「拒絶」「知性化」「同一視」「連帯」の4部分）と Time Perspectiveを構造する各次元との関連をカイ二乗検定結果より検討してみよう。

まず、「対象への取り組みの態度」（消極的、積極的）と「時間性」（刹那、有限、無限）との関連性をみるために行った結果を表12に示す。「対象への取り組みの態度」が「消極的」である自己存在様式においては、「消極的-刹那」と「消極的-有限」間に正の方向性をもった関連が認められたが、「消極的-無限」間には関連は見られなかった。一方、「積極的」である「対象への取り組みの態度」を示す自己存在様式にあっては、「刹那」「有限」「無限」それぞれの時間性の水準との間に正の方向で関連が認められた。このことから、対象への取り組みの態度が「積極的」である存在様式であれば、その人間の持つ時間性は「無限」にまで広がるが、「消極的」な取り組みの態度の場合には、時間性は「刹那」あるいは「有限」の水準で止まることが分かる。また、カイ二乗値が大であることから、「消極的」な取り組みの態度を持つ自己存在様式には、より強く「刹那」的な時間性が反映していると考えられる。

次に、「対象への取り組みの態度」と「かかわりの深さ」の水準である「浅」「深」との関連を検討するために行った結果を表13に示す。表より、総ての交絡において、正の方向の関連性が認められた。また、その方向性は、「対象への取り組みの態度」が「消極的」「積極的」にかかわらず、「かかわりの深さ」の「浅い」水準との間に密接な関連があることがうかがえる。つまり、対象への取り組みが「積極的」

表12 「対象への取り組みの態度」と「時間性」との関連

a \ b	H-H	H-L	L-H	L-L	X <sup>2</sup>
消極的-刹那	45	17	6	48	44.2760 ***
消極的-有限	38	11	8	47	41.7027 ***
消極的-無限	28	28	28	28	0.0000
積極的-刹那	33	16	18	41	14.5757 ***
積極的-有限	49	3	9	46	65.2881 ***
積極的-無限	36	21	20	27	4.4006 *

注) \* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり  
 a : 「対象への取り組みの態度」の各水準と「時間性」の各水準との交絡  
 b : 各水準の得点による上位群, 下位群の組み合わせ

表13 「対象への取り組みの態度」と「かかわりの深さ」との関連

a \ b	H-H	H-L	L-H	L-L	X <sup>2</sup>
消極的-浅	41	12	8	39	36.2893 ***
消極的-深	42	10	18	40	27.3541 ***
積極的-浅	44	12	6	46	48.7297 ***
積極的-深	43	13	14	40	28.4822 ***

注) \* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり  
 a : 「対象への取り組みの態度」の各水準と「かかわりの深さ」の各水準との交絡  
 b : 各水準の得点による上位群, 下位群の組み合わせ

表14 「対象への取り組みの態度」と「対象のひろがり」との関連

a \ b	H-H	H-L	L-H	L-L	X <sup>2</sup>
消極的-自己	41	13	9	37	31.5620 ***
消極的-他者	45	8	9	44	48.9231 ***
消極的-もの	28	23	22	31	1.8674
積極的-自己	50	9	7	40	51.3505 ***
積極的-他者	43	12	12	47	38.1420 ***
積極的-もの	30	21	15	31	6.6831 **

注) \* 5%水準で有意差あり \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり  
 a : 「対象への取り組みの態度」の各水準と「対象のひろがり」の各水準との交絡  
 b : 各水準の得点による上位群, 下位群の組み合わせ

であろうと「消極的」であろうと、現代人はより「浅い」水準で、対象とかかわっていると見え、このことは、前述の「かかわりの対象」との関連の検討結果と照合するとき興味深い。

更に、表14には「対象への取り組みの態度」と「対象のひろがり」との関連を見るための検討結果を示す。表より、「消極的—もの」を除いた総ての交絡において正の方向性をもった関連が認められる。これより、「対象への取り組みの態度」が「積極的」であれば、その人間が生きる世界の「対象のひろがり」は「もの」にまで広がっており、「消極的」であれば、他人にまでしか広がっていないことが示唆される。

### Ⅲ 自己存在様式と Time Perspective との関連

#### Ⅲ-1 「感情の状態」を規定するTime Perspective

「ある様式 (the being mode)」と「持つ様式 (the having mode)」における感情の側面として、security (安定感) と insecurity (不安定感) の二つの方向性が、それぞれの内的世界の特徴的な感情の状態であることは既に述べた。本研究における分析の結果は、「安定感」という感情の状態を継続して持ちつつ生きる人間のTime Perspectiveは、その時間性は「無限」へと広がり、かかわりは「深」く、またそのかかわりは人間のみでなく「もの」にまで対象が広がっているということを示した。即ち、広いTime Perspectiveにおいて存在していると言えよう。しかし、関連の強さに着目すると、Time Perspectiveにおける時間性は、「無限」よりも「有限」との間で、感情の状態としての「安定感」と関連の強いことが示された。このことから、「安定感」の質について検討する必要がある。「安定感」とはフロムの言う「ある様式」を反映する感情の側面であることは既に指摘した<sup>10)</sup>。ここで、時間性が「有限」であるということは、未来に目標などを立て、そのことを目指し生活することであり、本来無限に広がっているはずの自己の可能性を有限に狭めてしまうことを意味している。「安定感」と「有限」の関連が最も強いということは、この「安定感」は何か目標をもって生きることのでられるものであることを示唆している。これは、「ある様式」における確固とした「安定感」ではない。フロムによると、「ある様式」における人間は時間をも超越する<sup>11)</sup>。従ってその時間性は無限である。「安定感」という感情の状態と「有限」という時間性との間に、「無限」との間よりも強い関連があるということは、その「安定感」は何か「物」を「持つ」ことによって得ている「持つ様式」の安定感であることを示唆しており、未来に目標を「持つ」ことで現在から逃避する存在様式の出発を示すものと言える。次に、対象とのかかわりが「深」いということは、対象の保有する能力や本質を生かすかかわりであり、対象が本来的に保有する「命」を最大限に尊重することと言える。このことに関連してフロムは「彼らは自己の能力を生み出し、ほかの人々や物に命を与える」<sup>12)</sup>と「ある様式」の人々について述べている。対象により深くかかわれるということは、「ある様式」の関係を結ぶということを示している。対象により深くかかわれば、その人間の感情の状態はより「安定感」を増大させることになる。更に、「対象のひろがり」という側面から人間の「安定感」について言及すると、感情の状態の「安定感」は「もの」との間よりも「他者」との関連が強いことに着目する必要がある。このことは、自己を包括した他人までもふくむ「共にある世界」までしかそのかかわりの対象世界を広げていず、

その中で「不安定感」を得ている存在様式の多いことを表していよう。前論文の因子分析的検討の結果抽出された自己存在様式の第1因子が「同一視」の因子であることをはじめとして、「他者」の関与している因子が多いことは、現代人の持つ「対象のひろがり」は「他者」までしか重きは置かないものであることを反映していると言えよう。

一方、「不安定感」の感情が高い状態にある人間のTime Perspectiveの質に関してみると、その時間性は「無限」にまでは広がらず「有限」であり、対象とのかかわりは「浅」く、「対象のひろがり」は人間にとどまり「もの」にまでは至らないということが示された。即ち、Time Perspective が狭いと言えよう。まず、時間性に関しては、「有限」よりも「刹那」的な時間性との間に強い関連が認められた。自発的に自己の生を経験することが出来ないために、スピードや飲酒など代用品としての興奮を得ようとするとき、その人間にとっては未来も過去もないとフロムは指摘する<sup>13)</sup>が、そのような人間にとっては、その時々真剣に取り組みたくない「現在」だけがあり、そこから「逃げる」ことが心的世界を占める機制となっていると言える。その結果は、生の喜びの代用品を求め続けるという「不安定感」の増大する存在様式を取りつづけることになるのであろう。また、「刹那」ほどの強い関連ではないが、「有限」との間にも関連が認められた。ここからは、前述のように、目標を持つことで自己の保有する他の可能性を切り捨ててしまっていることによる「不安定感」の増大ということを示していよう。次に、「かかわりの深さ」の次元から「不安定感」との関連を見てみよう。「持つ様式」においては、物を「持つ」ことが存在の証になるが故に、物に対して非常に貪欲であるとフロムは主張する<sup>14)</sup>。それは、物を持つことに執着しているのであり、物に対して愛着を持っているのではない。Time Perspectiveの構造において、かかわりの「浅」いことを示す項目の一つに、「良いものを買うときは、メーカー品（ブランド品）を買っている」（具体的質問項目視点「執着」の部分）を選定しているが、ここでは、ブランド製品を買うことで、自分までもブランド製品のように高価な「物」と気分的に位置付けてしまっている「持つ」存在様式を記述している。「物」は、道具存在として人間の日常性の中に働くという機能を持っている。だが、ここでは、その「機能」を生かすというよりも、ブランドの名称だけが遊離しており、「物」の命は生かされていないことになる。これがかかわりの「浅」いことであり、そのように、物を単に「持つ」ことだけで安定感を得ている心的世界は、物の本質に接近し得ないが故に空虚であり不安定とならざるを得ない。物の豊富な現代社会状況の反映を看取することが出来る。更に、「対象のひろがり」に関しては、「不安定感」の高い者の「対象のひろがり」は、自然と物までを包括する「もの」にまでは広がっておらず、「もの」とのかかわりは希薄であることが示され、「不安定感」と「自己」との関連が強いことから、「自己」中心的に対象とのかかわりを持つ者の「不安定感」の質をうかがい知ることが出来る。自己とかかわる世界、即ち「独自の世界」とは他の動物が持てない独特の世界であり、自己自身の気付き（awareness）が問題となる世界であることは前論文において述べたが、自己自身への気付きを前提として自己とかかわる人間の感情が不安定感であることはあり得ない。「自分自身にのみ興味を持ち、総ての物をも自分のためだけに欲しいと思ひ、与えることには喜びを感じず事なく、ただ奪い取ることに喜びを感じている」<sup>15)</sup>とフロムが「持つ様式」について言及していることと照合すれば、欠乏を埋めるためにだけ、自分中心的に生きるが故に、感情の状態は「不安定感」となるのであろう。また、「不安定感」という感情の状態と「もの」との間に関連が見られなかったのは、「もの」の命を生かすことをしない「死んだ関係」

を結ぶ「持つ」自己存在様式にあっては、当然の帰結と言えよう。

### Ⅲ-2 「かかわりの対象」を規定するTime Perspective

次に、いかなるTime Perspectiveの質が、「かかわりの対象」（自己・他者）を規定しているのか、各次元ごとの分析結果に基づいて検討してみよう。

まず、「かかわりの対象」が「自己」であれ、「他者」であれ、「無限」の時間性と関連が見られなかったことから、「有限」の時間性の中で対象とかかわっていることが示された。先に、未来に目標を持ち、未来に目を向けることで「安定感」を得ている人間像を描いた。それは、「無限」の時間性の中には生きていない人間の姿である。同様のことを「かかわりの対象」に関する分析結果も示している。また、「かかわりの深さ」に関して、「かかわりの対象」が「自己」「他者」にかかわらず、「浅」との間に「深」よりも強い関連が示され、かかわりの質は「浅いものであることがうかがえた。前論文に示した因子分析の結果は、第1因子「劣等感情を伴う同一視」、第5因子「自己中心性に基づく拒絶」の各因子を抽出したが、自分が劣等感にさいなまれることから逃れるために、他者と同じ行動を取ったり、逆に他人の意見に耳を貸さないという態度は、他者との関係の中で他者も自己をも抑圧した存在様式を示すものであり、更には、第6因子「幼児性に基づく退行」の因子に示されるように、社会的な責任を回避、放棄するといった態度も、自分自身とのかかわりの浅さを示している。このことは現代人の多くが、自己に対しても、他者に対しても「浅い水準でかかわりを持つことを推量させる。更に、「対象のひろがり」に関してみると、「自己」とのかかわりの持てる者のかかわりの「対象のひろがり」は、「もの」にまで広がるが、「他者」とのかかわりの場合には「対象のひろがり」が、人間に限定された「他者」にまでしか広がっていない。他者にかかわるためには、自己に対しても、本来的な自己を現成せしめるという実存的な関係<sup>16)</sup>で、即ちフロムの言う「生きた関係」<sup>17)</sup>でかかわることが前提となる。だが、ここで「対象のひろがり」が人間にとどまっていることを考慮すると、「他者」との関係における自己存在様式の内実は、因子分析結果に示される「同一視」、他者の「拒絶」、他者からの「孤立」などのように、「生きた関係」を結んでいない「持つ様式」のものであると言えよう。即ち、他人、物や自然と「生きた関係」を結べるほどTime Perspectiveは広がっていないということである。

物が溢れるほど豊かになり、その「物」の機能を十分に使い果たすことなしに、むだに大量消費する現代社会状況は、フロムの言う「限りなき生産と限りなき消費という悪循環」の中の人間の「慢性的飢餓状態」<sup>18)</sup>を生んでいるのであり、その中では、かかわりの対象のひろがりはいかに人間だけにとどまらざるを得ない。従って、「もの」までを包括する「まわりの世界」に気を配ることのない存在様式は、「持つ様式」とならざるを得ない。そこには「他者」と「死んだ関係」でしかかかわることのないTime Perspectiveの狭量化した人間像を描くことが出来る。

### Ⅲ-3 「対象への取り組みの態度」を規定するTime Perspective

更に、「対象への取り組みの態度」（積極的、消極的）をTime Perspectiveの質がどのように規定しているかを分析結果に基づいて考察してみよう。自己存在様式に関する「対象の取り組みの態度」の側面として、「積極的（active）」と「消極的（passive）」という二側面を設定したが、自己の能力を生産的に、能動的に使用するという内面的能動性の表出か、あるいはそうでないかとい

う点でこの二側面は分化し、前者は「ある様式」の、後者は「持つ様式」の特徴的な態度である。

「対象への取り組みの態度」が「積極的」である存在様式を示す人間のTime Perspectiveは、時間性が「無限」にまで広がり、「対象のひろがり」が「もの」へと広がっているという特徴を持つことが示された。しかしながら、時間性に関して言えば、「有限」の時間性との関連の方がより強い。既に述べてきたように、「積極的」な態度とは、自己の能力、可能性を能動的に、生産的に使用していく態度を表すが、「有限」の時間性との関連が強いことから、可能性を限定して生きる傾向を推量させる。このことから、目標を未来に設定し、スケジュールをびっしりと立て、せかせかと忙しく生活するといった外面的能動性、つまり受動性に基づいて生活する現代人の存在様式がうかがえる。本来無限に広がる自己の能力にある制限をつけ、限定してしまう人間像が描ける。「有限」の時間性の中で生きる人間の「積極的」な態度は、フロムが「ある様式」の特徴として述べた「内面的能動性」<sup>19)</sup>の表出とは異なったものと言える。「積極的-有限」間に強い関連が認められたということは、現代人の存在様式が「持つ様式」であることの傾向性を示している。

一方、対象への取り組みの態度が「消極的」である存在様式を示す者のTime Perspectiveは、時間性が「有限」で、「対象のひろがり」は人間に限定された「他者」までにしか広がっていないという特徴がある。時間性の側面から言えば、「消極的」な取り組みの態度と「刹那」的な時間性との関連がより強いことから、自己の中に行動規範がなく、外に刺激を求めて止まない現代人の存在様式を推量出来る。自己の中に行動規範がないということは、マス・メディアからの情報や他人の噂話など判断のよりどころを自分の外に置くことであり、自己の能力を能動的、生産的に使用している存在様式とは言えない。前論文の自己存在様式に関する第1因子「劣等感情を伴う同一視」は、他者が自分の行動を決める際の指標となる存在様式にかかわる因子であり、かつ「刹那」的な時間性の中に生きる人間の「消極的」な態度を表している因子であると言える。また、「消極的」な態度と「他者」までの対象のひろがりとの関連の強さは、自己存在様式に関する第8因子「他者疑惑を伴う孤立」を裏付ける結果と言えよう。これは、日常生活の中における他者の存在を認めてはいるが、他者を信頼せず疑っているので、自らは積極的な働きかけをしないという存在様式を示す因子である。このことから、現代人の多くは他人と生産的な関係を結ぶことをせず、自己中心的、利己的に生きる傾向性のあることを推量させる。そこには、フロムが指摘した「持つ様式」における精神的な貪欲さ<sup>20)</sup>の反映を看取することが出来る。

「かかわりの深さ」に関しては、「消極的」「積極的」の双方の態度と「かかわりの深さ」の「浅」「深」それぞれとの間に関連が認められたが、特に「浅」との間に強い関連性が示された。即ち、「積極的」な態度で取り組もうと「消極的」な態度で取り組もうと、対象とのかかわりは「浅い」傾向を示した。先に、時間性との関連で、「有限」の時間性で生きる人間の「積極的」な「対象への取り組みの態度」は、外面的能動性つまり受動性の表出であると述べたが、ここでも同様なことが言える。前論文で、対象に「積極的」な態度でかかわる自己存在様式の因子として、第5因子「自己中心性に基づく拒絶」を抽出している。これは、自分の意見や思いは絶対に通そうとし、他人の考えや意見は排除する傾向を示す存在様式である。また、対象への取り組みが「消極的」な態度である自己存在様式の因子としては、前述した第8因子「他者疑惑を伴う孤立」がある。これは、他者は信頼するに足る対象ではないので、対人関係は結ばないという存在様式を示している。これら第5因子や第8因子に示される存在様式においては、対象と「深」いかかわりを持たな

いという共通点がある。かわりが「浅」という Time Perspective の質が、他者に対する「拒絶」や他者からの「孤立」という存在様式を規定していると言えよう。また、自己に対するかわりにおいても、第4因子「自己不確実感に基づく抑圧」や第6因子「幼児性に基づく退行」の因子の内容から、受動的な存在様式であることを示している。

以上より、「対象への取り組みの態度」が「積極的」である自己存在様式を示す人間の Time Perspective は、「消極的」である人間よりも広いと言えるが、各次元における側面間の関連の強さからは、Time Perspectiveの狭量化と「持つ様式」の増大化という現代人の状態像を描くことが出来る。

### おわりに

本研究においては、前論文<sup>21)</sup>の自己存在様式に関する因子分析的検討を踏まえ、自己存在様式と Time Perspectiveを構造する各次元間の関連をとらえようと試みた。その結果認められたことは、前論文でも触れたように、現代人の「持つ様式」の増大と、それを規定する Time Perspectiveの狭量化の傾向性であった。「持つ様式」の増大は、人間を無力感や空虚感に陥らせ、「精神的な死」<sup>22)</sup>の危機に直面させる。少なくとも受験戦争を切り抜け大学に入学したにもかかわらず、自分が何をしたら良いのか分からないといった、いわゆる五月病やスチューデント・アパシーの生起は、この良い例であろう。彼らは、大学合格という目標を単に「持ち」、受動的にその目標に向かっていったに過ぎず、結局のところ大学合格という目標からも、それに向かって努力する自分からも「疎外」されていたと言える。フロムは、このような「疎外」の状況から人間が救われるためには、「他人の不幸に、他人の親しい眼差しに、小鳥の歌に、緑の草木に感動する力」が必要であり、それを喪失してしまっていたならば、「いかなる自覚を持ってしても、われわれは救済されえない」と言う<sup>23)</sup>。そこには、自己、他者そして自然をも含む「もの」にまで至る対象と、「感動」という形でのかわりを創造する Time Perspectiveの拡大の必要性が示唆されるが、我々の生きる空間と時間とが限られたものである限り、「持つ様式」を最少とすることすら不可能に近い課題と言える。過去や未来に神経症的な希望を抱き、現在から「逃げる」生き方に Time Perspectiveの広がり期待し得ない。他者に「同一視」し、自己の失敗を認めず「抑圧」し、他者を「拒絶」といったことは、「ありのまま」の今の自己を受容していないことにつながる。自分自身と真っすぐに向き合うことには不安が伴う。だが、これを避けていては、フロムの言う「生に飢えた状態」<sup>24)</sup>へと至らざるを得ない。フロムは、現代人が自己疎外の事実気付いていないことを指摘している<sup>25)</sup>が、アパシーや種々の精神障害が大きな社会問題となりつつある今、このことは逆説的に、現代を生きる人間が自己の内にある「真の自己を求める欲求」<sup>26)</sup>に気がつき始めていると見ることも出来よう。このような問題に関しては、今後の研究課題にしたいと考えている。

本研究は、中島の1989年度茨城大学卒業研究で集積した資料に、新たな考察を加えたものであり、吉田が最終的に草稿を検討している。

最後に、本研究の実施にあたって、教育臨床心理学研究室ゼミナールに所属する学生諸氏及びその友人の多大な貢献のあったことを付記して、深甚の謝意を表したいと思う。

## 注

- 1) 中島千加子・吉田昭久・高次美佳「Time PerspectiveとPersonalityとの関連Ⅹ——自己存在様式を指標として」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）』40（1991），pp.67-85.
- 2) 「疎外（alienation）」とは，自己を行為の主体として体験出来ない状態のことを言う。
- 3) E. フロム（佐野哲郎訳）『生きるということ』（紀伊国屋書店，1977），pp.103-124参照。
- 4) 中島千加子ほか，前掲論文。
- 5) 吉田昭久・小熊均・小倉美智子「Time PerspectiveとPersonalityとの関連Ⅷ——Time Perspectiveの心的構造」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）』39（1990），pp.57-73参照。
- 6) M. ハイデッガー（桑木務訳）『存在と時間』（岩波書店，1973）上巻，p.104. この中で「現存在（Da sein）の根本構造としての「世界-内-存在」について言及している。
- 7) R. メイ（伊東博・伊東順子訳）『存在の発見』（誠信書房，1977），pp.194-205.
- 8) 中島ほか，前掲論文における調査を示す。
- 9) 同書。
- 10) 同書及び，E. フロム，前掲書，pp.151-154参照。
- 11) E. フロム，前掲書，pp.175-178.
- 12) 同書。
- 13) E. フロム（日高六郎訳）『自由からの逃走』（東京創元社，1965），p.281.
- 14) E. フロム『生きるということ』，pp.103-124. ここで，「持つ様式」についての分析と，その影響について述べられている。
- 15) 同書，p.21.
- 16) S. キルケゴールによれば，「実存」とは情熱を持って自己とかかわり，自分自身が「本来的な自己」を現成させようとする人間の在り様である。
- 17) E. フロム『生きるということ』，pp.125-149. ここに，「ある様式」に関する分析がなされている。
- 18) 同書，pp.103-124.
- 19) 同書，pp.126-127.
- 20) 同書，p.21.
- 21) 中島ほか，前掲論文。
- 22) E. フロム（作田啓一・佐野哲郎訳）『希望の革命』（紀伊国屋書店，1970），pp.16-17.
- 23) E. フロム（鈴木重吉訳）『悪について』（紀伊国屋書店，1965），p.205.
- 24) E. フロム『自由からの逃走』，p.281.
- 25) E. フロム（懸田克躬訳）『愛するということ』（紀伊国屋書店，1959），pp.18-19.
- 26) E. フロム『生きるということ』，p.142.
- 27) 中島千加子「自己存在様式と時間展望との関連」（茨城大学教育学部卒業論文，1989，未発表）。

## Appendix I - i 質問票

## 大学生の日常生活に対する態度調査

（調査のお願い）

現在当研究室では、「現代青年の意識形成における諸問題」という一連の研究を行っています。その一環として、現代青年の日常の意識と行動について、四年制大学生を対象とした調査を行うことになりました。つきましては、現代青年の意識の問題を追及する重要な研究となりますので、ぜひともご協力ください。なお、皆様の回答は、全資料を使ってコンピュータによる統計処理を行いますので、個人の結果が外部にもれるようなことは絶対にありません。また、調査の結果は研究以外の目的には使いませんので、自分の思ったとおりを正直にお答えください。

茨城大学教育臨床心理学研究室

初めに、次の事項に○お答えください。

- I. 調査年月日 平成元年12月 日  
 II. 大学名 \_\_\_\_\_ 大学  
 III. 学部名 \_\_\_\_\_ 学部 \_\_\_\_\_ 学科  
 IV. 性別 a. 男 b. 女  
 V. 年齢 a. 18～19歳 b. 20～21歳 c. 22～23歳 d. 24歳以上

## \* 回答の際のご注意

- I. これから〔1〕〔2〕の設問に答えていただきますが、それぞれに設問をよく読み、例にならって各質問項目に答えてください。  
 II. 質問にはとばさず全部回答してください。  
 III. 右側の空欄は、回答には関係がありませんので、何も記入しないでください。  
 〔1〕 省略  
 〔2〕 次の各項目では、私達が日頃「している」事や「感じている」事について述べられています。それぞれの項目をよく読んで、あなたが普段「している」事を想起し、そのままを例にならってお答えください。

あてはまる

あてはまらない

例) 自分に合った部屋にするために、工夫をこらしている。

 \_\_\_\_\_

1. いろいろと気を遣うので、多くの人とはつきあわない。
2. 神社などで老木を見ると、荘厳な感じに圧倒される。
3. 夜、空を見上げて星をながめるようなことはない。
4. 棚の上にはこりがたまっていても、特に掃除はしない。
5. 自分にとって大切な人の相談には、いつも親身になる。
6. たとえ悩みを相談されても、所詮何の手助けもできない。
7. 深い山あいに入ると、神々しい感じを受ける。
8. 雨の日は、うとうとしさばかり感じて過ごしている。
9. 重要なことを率先してやるよりも、他人の意見に従っている。
10. 毎日同じようなことの繰り返しで、いつも退屈している。
11. 道を歩いている時、花や草木に目を向けることはない。
12. 足を止めてまで、花に見入るようなことはない。
13. 一人で悩んでいるより、友達とおしゃべりしている。

\_\_\_\_\_  (1221)  
 \_\_\_\_\_  (3131)  
 \_\_\_\_\_  (1133)  
 \_\_\_\_\_  (1232)  
 \_\_\_\_\_  (2223)  
 \_\_\_\_\_  (1223)  
 \_\_\_\_\_  (3132)  
 \_\_\_\_\_  (1112)  
 \_\_\_\_\_  (1123)  
 \_\_\_\_\_  (1211)  
 \_\_\_\_\_  (1131)  
 \_\_\_\_\_  (1233)  
 \_\_\_\_\_  (1111)



Appendix I -iii

- |   |       |                                       |
|---|-------|---------------------------------------|
|   | あてはまる | あてはまらない                               |
| 44. どのような時でも、自分のすること全てに責任をもって行動している。    | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (3212) |
| 45. 澄みきった青空に気がつくと、つくづくとながめてしまう。         | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (3231) |
| 46. 過去の失敗はすんでしまったことだから、くよくよ悩まない。        | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (3112) |
| 47. 結局のところ、心の奥底まで理解しあえる友達もっていない。        | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (1222) |
| 48. 就職を有利にするために、毎日の勉強をしている。             | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (2211) |
| 49. たまたま行きあわせた人の話でも、本気で相手の話を聞く。         | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (3222) |
| 50. 病気で思うことができないと、落ち着いて寝てられない。          | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (2113) |
| 51. たとえ突然死ぬようなことになっても、これまでの人生を悔いることはない。 | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (3213) |
| 52. 何も夢中になるものがなく、なんとなく毎日を過ごしている。        | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (1212) |
| 53. 階段などで困っている障害者を見かけたら、手を貸している。        | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (3122) |
| 54. 良いものを買うときは、メーカー品（ブランド製品）を買っている。     | _____ | _____ <input type="checkbox"/> (2131) |

以上で質問は終わりです。

多くの項目にご協力していただきまして、どうもありがとうございました。

皆様の資料は、研究のための貴重な資料として、十分に活用させていただきます。

注)  の下の数字はコード番号。

(時間性、かかわりの深さ、対象のひろがり、交絡部分における番号)を示す。

刹那… 1	浅… 1	自己… 1	表 2 参照
有限… 2	深… 2	他者… 2	
無限… 3		もの… 3	

Appendix II - i

G - P 分析結果  
《自己存在様式》

項目番号	H-H	H-L	L-H	L-L	カイ二乗の値	
22	65	20	5	80	87.4286	***
15	77	9	20	66	76.8148	***
21	56	26	13	77	51.7895	***
33	72	15	24	58	49.2239	***
28	43	44	7	89	40.8016	***
24	77	13	35	51	38.2413	***
27	81	9	32	37	36.1483	***
34	36	54	5	88	31.5392	***
26	30	59	6	92	22.8317	***
17	20	65	1	97	22.7025	***
6	46	36	18	67	21.5332	***
3	28	51	7	89	21.4654	***
31	21	69	2	96	19.8093	***
30	25	58	5	91	19.8024	***
23	16	72	0	99	19.6842	***
35	23	63	4	97	19.5177	***
19	55	29	28	58	18.4288	***
2	20	64	3	98	18.2933	***
14	84	6	54	25	17.5252	***
38	64	18	40	44	16.4200	***
13	19	68	3	92	14.9135	***
36	25	66	9	87	10.2854	**
11	22	63	8	88	10.0410	**
32	74	16	46	30	9.6823	**
12	65	16	49	33	8.1377	**
4	42	44	25	64	7.9681	**
20	7	90	0	99	7.4089	**
40	16	65	6	87	6.9351	**
16	86	5	64	14	6.5285	**
8	62	19	46	22	6.1156	*
1	22	68	11	84	5.2196	*
29	10	78	3	94	4.8312	*
39	89	4	70	11	4.7320	*
18	8	84	2	99	4.4194	*
7	95	2	82	3	4.2988	*
37	72	17	48	24	4.2474	*
25	85	4	73	8	1.8724	
9	5	87	2	98	1.6092	
10	88	4	83	8	1.4741	
5	76	18	72	11	1.1185	

注) \* 5%水準で有意差あり  
 \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり

Appendix II - ii

G - P 分析結果  
《Time Perspective》

項目番号	H-H	H-L	L-H	L-L	カイ二乗の値	
41	58	22	16	74	51.5948	***
39	56	29	14	69	41.5086	***
21	77	8	37	41	36.0254	***
35	53	30	16	70	35.7986	***
17	64	21	30	58	29.5839	***
14	63	18	31	50	25.9524	***
20	42	48	12	83	25.9016	***
25	46	29	17	61	24.6776	***
37	35	49	8	80	24.3232	***
52	48	37	19	72	23.6137	***
33	62	29	25	55	23.1715	***
50	52	32	19	59	23.1586	***
42	83	7	57	32	20.8493	***
30	34	39	12	74	20.4362	***
54	54	31	26	62	20.0874	***
53	59	19	31	45	19.2509	***
45	86	7	57	28	18.1582	***
49	69	21	36	44	17.9839	***
32	37	48	14	79	17.6155	***
9	37	46	14	73	16.4136	***
47	23	62	4	81	15.8948	***
10	55	35	29	62	15.5580	***
18	36	39	17	72	15.5403	***
43	65	25	36	48	15.3847	***
7	64	23	35	45	15.3461	***
34	28	61	8	86	15.2376	***
28	51	30	27	56	15.2230	***
40	88	8	62	27	14.5770	***
27	83	8	60	27	13.9307	***
24	86	8	62	26	13.2379	***
2	70	15	51	38	12.8795	***
48	15	76	2	97	12.1751	***
8	45	45	24	71	12.0926	***
13	60	19	40	41	12.0435	***
6	31	47	14	73	11.5992	***
23	54	22	32	41	11.3022	***
31	10	74	1	99	9.6581	**
44	62	20	43	38	9.0185	**
26	6	86	0	100	6.7321	**
51	44	44	29	64	6.6529	**
12	21	65	36	53	5.1178	*
19	87	7	70	16	5.0169	*
36	61	23	42	32	4.3621	*
15	74	12	64	22	3.6658	
46	58	37	44	48	3.2978	
38	73	48	15	35	3.0302	
3	10	88	4	94	2.7692	
29	14	43	30	51	2.3313	
4	30	66	39	55	2.1531	
5	95	3	91	6	1.0809	
22	25	66	30	62	0.5741	
11	9	81	12	83	0.3181	
16	9	86	8	87	0.0646	
1	13	74	13	80	0.0338	

注) \* 5%水準で有意差あり  
 \*\* 1%水準で有意差あり  
 \*\*\* 0.1%水準で有意差あり